

No.31

# 明日への 扉

## 争いの無い世界に 筆の力を信じて

ひがし しん いち ろう  
東 慎 一 郎 さん



エジプトで初めて描いた壁画は、2羽のハトが互いに花をささげ合う絵（写真）。以降、世界中で次々に制作し、今年5月、目標だった10か国目には母国・日本（沖縄）を選んだ。目標は達成したが、今後も描き続けると語る。



昭和44年鹿屋市生まれ。鹿屋高校、鹿児島大学を卒業後、平成5年から19年まで、ラ・サール学園（鹿児島市）や西原小学校など、県内の小中高校で美術講師・教員として勤務。平成21年札幌市にデザイン事務所を設立。平成26年から世界中で壁画を描く活動を続ける。（47歳）

平成26年3月、ラ・サール学園時代の教え子に会うため、エジプト、ヨルダンを訪ねる旅に出掛けました。彼は当時エジプトで通信記者として、中東・アフリカの内戦などを継続的に発信していました。旅のきっかけは、未踏の地を踏む好奇心と、教え子の活躍を実際にこの目で見たいということでした。

さらにもう一つの理由がありました。実は20数年間、絵描きとして、表現者として、描くべきものが見つからず、ずっと苦悩していました。絵についての勉強はしてきて、それなりに描けるようになって仕事にしていきましたが、「描きたいものが無い」「伝えるべきものが無い」というのは致命的なことと感じていました。この旅で表現すべきことが見つければいいなと思っていたのです。

旅は想像以上にインパクトのあるものでした。「アラブの春」の影響が残るエジプトのカイロ市内の惨状を目の当たりにし、ヨルダンでパレスチナ難民だったという人の話や、教え子のシリアでの取材の様子を聞いているうちに、悲しみと怒りの感情がこみ上げました。死者に対する尊厳も無い中東の現実、殺戮が殺戮を呼ぶ負の連鎖に苦しむ人々、理不尽な子どもへの死…。旅の中で最も衝撃を受けた日の翌日、ノートの上端に、平和の象徴であるハトの絵を描

いている私がいきました。その2日後、カイロ近郊ギザのピラミッド通りで壁画を描く機会に恵まれました。そして、スプレー缶を振りながら、表現者として、なすべきことに出会ったことを確かめました。ライフワークとして、平和を祈りながら、世界中で壁画を描く活動をしようと思ったのです。

エジプトを皮切りに、インド、ウクライナ、メキシコなど、これまで世界10か国で壁画を描いてきました。政情不安定な都市、国境地帯、軍事施設内といった場所での制作は、平和のありがたさを強く感じる場でもあります。外国語での交渉と塗料の質にも毎回悩まされます。現場に入るまで壁の材質が分からなかったり、購入した塗料の色が違ったりすることもよくありますね。

活動を通して世界中に友人が増えました。個人的な友情と国家間のことと同じ平面上で論じることができないと思いますが、いつか「国家間の問題や紛争を友情で止められる日が来るのではないか」と思うことがあります。これからの壁画を描き続けようと思っています。平和な世界が訪れるまで。

  
FMかのや (77.2MHz)  
6月26日(月) 9時5分から  
東 慎 一 郎 さん が 出 演  
(予定)